2025 年8月3日 平和聖日礼拝（聖霊降臨節 第9主日礼拝）
メッセージ「自身の中の差別する心」 牛田匡牧師
聖書 マルコによる福音書 7章 24−30 節

今日は「平和聖日」です。しかし、世界情勢に目を向けると、戦争や紛争、暴力の応酬は年々激しさを増し、ますます多くの命が傷つけられ、殺されていっています。パレスチナのガザ地区では空爆が続けられている中、作為的な食糧不足による飢餓が深刻化しています。またロシアとウクライナの戦争も依然として収束が見られませんし、その他各国各地で紛争や内戦が続けられています。多くの国々が右傾化し、防衛費という名の軍事費が増額され、再び軍拡に進み出している中、日本も同じ方向に向かって進みつつあります。しかし、いくらたくさんの武器や兵器を買い集めたところで、国を守れるわけではありませんし、もちろん平和を作り出すことはできません。「戦争の世紀」と呼ばれた 20 世紀から、早くも四半世紀が経ちましたが、人類はそのことを歴史からちっとも学んでいなかったのだということが明らかになってきています。

戦争や紛争は、始めるのは簡単でも、終わらせるのはとても難しく、むしろ終わりはないとも言えます。なぜなら仮に国家間で戦闘の終了が宣言されても、水面下では報復の連鎖は止まらず、テロ行為は続けられ、あとに残されるのはただ社会の混乱のみというのが現状だからです。第二次世界大戦後には、「核兵器による戦争の抑止」ということが、まことしやかに謳われて、世界中に 12000 発を超える核兵器が製造、配備されて来ました。ですが、結局のところ、それらの存在によって戦争は抑制されて、世界は平和になるどころか、依然として戦争は続けられていますから、「核抑止力」というのは、嘘であり、単なる幻想に過ぎなかったことが明らかになりました。それにもかかわらず、未だに日本も核兵器を持つべきだという主張があることに驚きます。それは現実を見ていないということです。

それこそ、つい前の 20 世紀まで、私たちは核兵器に代表されるような軍事力などの「ハードパワー」によってこそ、国家や国民の安全は守られる。その上で経済活動や、文化交流などのソフト面での交わりも初めて可能になる。そのように教え込まれ、思い込まされてきたように思います。しかし、改めて考えてみると、平和を実現するのは、そのような「ハードパワー」ではなく、むしろ「ソフトパワー」だったのではないでしょうか。「北風と太陽」の寓話に示されているように、冷たい北風に表わされる強大な軍事力、破壊力によって、強制的に相手を従わせようとする時、相手はますます強固に反対しようとする、そうしなければ身の危険を感じるわけですから、そうせざるを得なくなるわけです。一方でゆっくりと太陽の光で温めたら、旅人の身も心も和らいでいくでしょう。お互いの歴史や文化、価値観を尊重し合い、学び合おうとする姿勢の中においては、お互いに警戒し合い、傷つけ合う

必要がありませんし、むしろ相手の持つ良いものを壊してしまうことがないように、守っていきたいと思うのが自然なことではないでしょうか。

平和を作り出すには、まず「隣の人と友達になること」。友達になるには、武器をもって相手を傷つけようとする必要はありません。ただ相手のことを知りたいと思うこと、素直に教えてもらおうとすることでしょう。そのことは大人よりも子どもたちの方が得意かもしれません。どうして、大人たちは平和を作るのに、武器が必要だと考えてしまうのでしょうか。何も持っていない丸腰の状態だと、自分の身を守ることができないと考えてしまう、その背景、根底にあるのは、常に「いつ襲われるか分からない」というような根源的な不安、不信感、恐怖心があるのではないでしょうか。確かに、爪も牙もなく、毛皮もない、「裸のサル」である人間にとっては、道具や火を使うことが、他の動物たちから身を守ることにつながってきたのだろうとは思いますが、聖書が伝えている物語においては、人間は、一人で生きるものではなく、人々と共に生きるものとして創られ、そしていつも命の神から「恐れることはない」「あなたは一人ではない。私があなたと共にいる」と語り掛けられ、励まされ続けている存在とされています。ですから、自分と周囲を見比べて区別し、場合によっては警戒して、敵視したり差別したりする心は、神様によって創られ与えられたものではなく、自身の中に自分で作り上げているものに過ぎないと言えるのではないかと思います。そして、それは歴史の中を生きられた人間であったイエス様においても同じでした。

今回の聖書のお話は、シリア・フェニキア生まれの女性とイエス様とのお話でした。同じ内容のお話がマタイ福音書（15：21－28）にもありますが、そちらでは「カナン人」の女性になっています。まず 24 節にある「ティルスの地方」ですが、ガリラヤ湖の北西、地中海に面した所にティルスという街があります。都市ティルスは「ヘブライ語聖書」にも登場する港町で、古代から工業と貿易が盛んで、地中海貿易の要所として、とても栄えていました。そんなティルスの地方に、イエス様がなぜ、ガリラヤ湖の周辺から何十キロも歩いてやって来たのか、そして「誰にも知られたくない」と隠れていたのか。その理由は何も書かれていませんので、分かりません。しかし、この地においてもイエス様は、隠れていることはできませんでした。そこにイエス様がいるということを聞きつけて、一人の女性がやってきました。彼女はシリア・フェニキアの生まれのギリシア人で、彼女には悪霊に取りつかれた幼い娘がおり、「娘からその悪霊を追い出してください」とイエス様に依頼しに来たのでした（26）。いつものように、イエス様は「はいはい、分かりました」と言って、相手の方の頼みを聞いてあげるのかと思いきや、そうではなく「まず、子どもたちに十分に食べさせるべきである。子どもたちのパンを取って、小犬に投げてやるのはよくない」(27)と言われました。「マタイによる福音書」では、さらに前置きとし

て「私は、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」（15：24）とまで言っています。つまり、「自分はイスラエルの人々、ユダヤ教の人々を救う使命を受けているのであって、異邦人で異教徒であるあなたや、あなたの子どものことは知りません。関係ありません」と回答したということです。だからこそ、自分の「子どもたちのパンを取って、小犬に投げてやるのはよくない」（27）と言われました。

犬好きな人が多い日本人の感覚では、「小犬」と聞くと可愛らしい印象を抱くかもしれませんが、古代イスラエル社会では、犬というのは、豚やハゲワシと並んで、穢れている動物の代表（マタイ 7：6、ルカ 12：21）でした。そのために「犬」ではなく、「小犬」と言ったとしても、それは相手を侮辱する言葉でした。どうして、いつもは優しいイエス様が、そのような侮蔑語、差別語を使ったのでしょうか。「ティルスの街」は、大昔から繁栄していた都市ですので、イエス様も含め、辺境の地であったガリラヤの人たちにとっては、「ティルスの人」と聞くと、金持ちで、自分たちから生産物をまきあげていく憎らしい相手という風に理解されていたのかもしれません。もちろん、この女性が一見してお金持ちであると分かるような姿でイエス様の前に来たのかといえば、決してそうではなかったでしょう。なぜなら、繁栄した都市というものは、その中に多くの貧しい人々を抱えているからです。表面的には上手に隠され見えにくくされていますが、そのような人々の搾取や使い捨てによって、都市は繁栄を維持するという構造を持っています。この女性は、社会的地位を持った男性と一緒に来たわけではなく、一人だけでやって来ました。それは社会的な後ろ盾がないことを意味します。また悪霊に取りつかれた幼い娘を持っていましたから、周りから「村八分」のような扱いを既に受けていたのだろうとも容易に想像することができます。

そもそも当時の社会にあっては、男性の足元にひれ伏して、物事を依頼できるのは男性だけでした。またユダヤ教の人たちが、異邦人・異教徒を汚れた罪人とみなして、交流をしないということも、当然周知のことでしたでしょう。そのような時代に、男性の後ろ盾なしに、異邦人・異教徒の女性が一人で、イエス様のもとに自ら訪問して来て、足元にひれ伏してお願いをするということ自体が、まさに「非常識」「常識はずれ」な行為でした（マルコ 5：21－43 では、会堂長ヤイロが娘の癒しを依頼しに来ている）。それにもかかわらず、彼女は周りから何と見られようと、何を言われようと、それ程までに必死な思いから、イエス様に「娘から悪霊を追い出してください」と頼んだというわけです（26）。しかし、そのような歴史的、文化的な背景がありましたから、イエス様もこの女性の願いに対して、無意識の内に、差別的に侮蔑的な「小犬」という言葉を用いて、拒否しました。それでも、この女性の方がイエス様よりも一枚「上手（うわて）」でした。28 節「女は答えて言った。『主よ、食卓の

下の小犬でも、子どものパン屑(くず)はいただきます』」。この「答えて言った」という言い回しは、他の箇所では、イエス様の言動として用いられている言い回しです。当時の社会で、賢い、偉いとされる人たちが、次々にイエス様を陥れようと問い詰めるわけですが、そのたびにイエス様は見事に言い返されて、相手は「ぐうの音も出なくなる」というようなお馴染みの展開です。それがこのお話だけは、反対に女性の方が機知に富んだ返答をして、イエス様が言い負かされています。

続く 29 節には「その言葉で十分である。行きなさい。悪霊はあなたの娘から出ていった」というイエス様の言葉が記されています。このような翻訳を読むと、イエス様が女性の言動に感心して、女性のことを評価したように読めますが、直訳ではただ「その言葉の故に行きなさい」「あなたの言うとおりに、生きなさい（ヒュパゲ）」だけです。ですから、このお話はイエス様が遠隔治療で悪霊追放の奇跡を起こした、女性のために癒しの奇跡を行ってあげたというお話ではなく、女性の真剣な思いと行動の後で、娘さんの精神錯乱の発作状態も収まったということだったのでしょう。

そもそもこのギリシア人の女性は、イスラエルの神を信仰していたわけではない異教徒でしたし、イエス様の所にやって来たのも、巷でうわさに聞いた力ある「癒し人」として、悪霊追放のためでしたから、この出来事の後で、イエス様の弟子になったとも何も書かれていません。これまでのキリスト教の歴史の中では、このお話をイエス様が、ユダヤ人だけではなく、異邦人にまで伝道したというお話として理解することが多くありました。イエス様が意地悪なことを言ったのも、異邦人・異教徒であるこの女性の信仰が本物かどうかをテストしたからだ、という理解もあったようです。しかし、改めて読んでみると分かるように、この女性との出会いによって変えられたのは、むしろイエス様自身の方でした。異邦人の異教徒の女性の言動、言葉と振る舞いによって、神の恵みというものがユダヤ人だけに注がれているのではなく、全ての命の上に注がれているということに気付かされた、教えられた、学ばされたのでした。イスラエルの子どもたちだけが救われるという偏狭な民族主義、差別する心から、イエス様自身が解放されて、命の神の懐の深さ、気前の良さ、その豊かさを知ることで、イエス様自身の境界線が打ち壊されていきました。隣人を警戒し、敵視するような自分の中の差別する心から、隣人と友達になり、相手を自分のように大切にする生き方へと変えられ、導かれていったのです。

平和へと思いを馳せるこの 8 月。私たちはそれぞれに自分の中にある差別する心、人と人とを区別し境界線を引く心、それらを乗り越え、隣の人たちと友達になっていくことができるように。そして自分たちの身の回りから、平和を作り出していくことができるように。全ての命を大切にされる神様と共にあって、歩みを進めてまいります。